

論壇

老後生活に生涯賃金6割

何歳まで働くのがよいのか。一定年齢に達した人は、誰でもこの点について真剣に考えるはずだ。先日、高齢化に関するある会議に出席していて、重要なことに気付いた。1年余分に働くことは、2年分の金銭的な余裕を与えてくれるということだ。

具体的な数字を想定して考えてみよう。20歳から働き始めて、60歳という年齢に近づいている人を想定してみよう。日本の男性の平均寿命を考えれば、この人は85歳くらいまで生きるとするのが平均

元重 伊藤 (国際経済学) 大学院教授

高齢者が働き続けられる社会に

的な姿である。もし60歳で引退するとすれば、20歳からの40年の稼ぎの蓄積で、残りの25年の生活を支えることになる。もちろん年金は出るだろうが、自分の蓄えを老後に回すというのが普通の姿だ。常識的に考えても、40年の働きで、残りの25年の生活を支えるのは大変なように思える。現役時代に貯蓄に励んでも、25年の引退生活の生活費を捻出するのは大変なことだ。25年を40年で割ると、0・625となる。生涯の稼ぎの6割以上のお金が老後の生活に必要ということになる。

そこで、65歳まで働くことにしたら、どうなるだろう。働く年数とすれば、20歳から45年に5年延びる。しかし、それだけではない。引退してから生活が20年に短縮化することになる。働く年数が増えるのと、働かない年数が減るのでダブルで効いてくるのだ。20年を45年で割ると、0・44となる。生涯

少子高齢化社会が進む中で、引退生活に入る時期を遅らせることの必要性が叫ばれている。年金財政を健全に保つためには、将来的には年金の支給開始年齢を遅くするというのを真剣に考えなくてはいけない。諸外国ではそうした動きが顕著である。日本でも65歳まで支給開始年齢を上げる途中にある。将来的にはさらに延ばすことの検討も必要だろう。

寿命延び、元気なシニア

健康寿命が延び、元気なシニアが増えている。私が生まれた頃の男性の平均寿命は60歳前後であった。それが今は85歳くらいまでに延びている。人間は歩くスピードでその人の高齢度が測れる。そうだが、今の70歳の人の歩くスピードは、1992年と2002年を比べると、この10年間で11歳若がえっているという。

そうした元気なシニアの方々に、もっと働く機会が増えるような制度改革が必要である。政府がそうした仕組みを作るだけでなく、より多くの方が現役としてより長く働き続けたいと考えるようになることが好ましい。そうした社会になれば、引退後の生活の不安も少しは解消するようになるだろう。

*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。無断転載、複製を禁じます。